

## 文 化 性

京都府  
京都剣道教室  
中学3年 根 来 修

“Keiko is not training.” これはある外国人剣士の言葉だ。剣道は、常に向上心を持ち稽古に打ち込むこと。相手を敬い礼儀を重んじること。技術・身体だけでなく、精神・人格を鍛え向上させること。これらは剣道を始めた頃からずっと、先生から教わってきた。「剣道の稽古は練習とは違う。」そのことを外国人剣士も知っているのだ。

中学3年の夏、1カ月程台湾とアメリカから、母国で剣道をしている中学生が、僕が通う道場の稽古に参加していた。日本語での会話はできなくても一緒に剣道をしていると、みんな少しずつ仲良くなっていった。剣道を通じて心の交流ができること、国籍に関わらず様々な人と関わり合うこと。こうして友達が増えることは嬉しい。「交剣知愛」とは、まさにこのことだと感じた。そうして共に人間的に技術的に向上できる。これは剣道だからこそできることだと思う。

僕が稽古をしている旧武徳殿。そこには外国人観光客がよく稽古の見学に来る。僕はその方々に聞いてみた。“What attracts you to Kendo?” 「剣道はどこが魅力的ですか?」「文化性がすばらしい。」多くの人がそう答えた。藍染の道着袴姿、竹刀の扱い方、そして所作。それらからも他の競技にはない美しさ、日本人らしさ、日本の魅力を感じてくれている。剣道をしていることが誇らしい。そう思えてくる。自分はこれからも剣道を通じて人として成長しよう。改めてそう感じた。

世界は国際化が進んでいる。剣道も、国際剣道連盟加盟国は50カ国以上にのぼり、3年に一度の世界選手権は17回も開催されている。世界の剣道の道場の数も増えているという。その中で課題となっているのが「文化性」と「競技性」のバランスだ。文化性は、剣道の持つ歴史の中で長く受け継がれてきた武士の精神と、それに基づく作法。競技性は、試合の勝敗、ルール制だ。試合では、一本に至るまでの経過や技の出来栄え、礼儀を大切にすることが文化性。一方、競技性は、有効打突とその結果だけを重視する。さらに剣道は一本かどうか判断するのが難しい。他の競技と違い、「面に竹刀が当たったから一本」というように、簡単には決まらない。「あの判断は本当に正しかったのか。」審判をする時、僕は気になってしまう。世界では競技性を重んじる動きもある。当てるといふ技術的側面を追求するのもその一つだ。競技性が強まれば、剣道人口は増えるかもしれない。剣道が競技として発展するかもしれない。オリンピック競技にもなるかもしれない。しかし、それは剣道における真の国際化ではない。僕はそう思っている。ただ剣道人口数を増やすこと、剣道の普及とはそういうことじゃない。試合で勝つために技術的な向上はもちろん必要だ。ただそれと同時に、剣道が持つ素晴らしい文化性、剣の理法の奥にある武士の精神を、世界の人々と共に学び、共に人間形成の道を進むこと、これこそが、剣道の国際化の本質だ。僕はそう考える。

僕が住む京都は、世界有数の観光都市であり世界に誇る文化都市だ。日々、日本文化を身近に感じながら生活している。加速する国際社会の中で、将来を担うのは僕達だ。「僕は社会に貢献できる人材になる。」そのために、剣道の文化性、武士の精神を大事にする日本が誇る真の剣道を学び理解する。“Keiko is not training.” 日々の稽古が、その一歩だ。